

# 日本看護歴史学会

## 會報

日本看護歴史学会  
第21号  
1995年9月20日

雑感——第九回学会に参加して

高嶋 妙子

久しぶりに故郷でこころゆくまでリフレッシュできたような、そんな満たされた思いで帰宅しました。

ゆったりとした雰囲気の中で、しかし中身は密度濃く、第九回学会も大成功でした。

顧みまずと私自身は、第四回大会以来の参加で、会費納入はしていますが、歴史的には幽霊会員として、歴史という言葉への郷愁だけで在席させていただいています。

看護史研究者として、その道一筋を歩みたかった夢は、今のところ遠退いてしまいました。このような場でテーマに没頭していらっしやる方々に出会うと、かつての夢を捨ててはいない自分に気付かされます。分科会の話提供

者の苦労話にはたまらなく気がそそられました。

懇親会でも少し言いましたが、昔ほんの僅かでも歴史学に触れ学んだことを役立てて、私は管理を実践してきたと思っています。大学の通信課程で史学科に学んだことを指すのですが、卒業論文の「わが国における職業看護の芽生え」はともかくとして、これでもかこれでもかと「歴史学」を学んだ印象が強いのです。堀米庸三の「歴史をみる眼」(NHKブックス)のはしがきの中の一節が思い起こされます。

「過去の総体としての歴史は、人間の理解を絶した無である。しかし、人間はこの無を限定し、そこに意味を求めずにはいられない。

なぜならば、自からの完全なる無意味さに耐えられる人はなく、又、人生を意味づけるには、そのまえに、世界を意味づけなければならぬから。もちろん、その意味づけには宗教的な、また哲学的な方法もある。しかし、歴史的なそれもまたわれわれの根本的欲求にもとづく方法である。」

組織も生き物であることはあらゆるところで実感するのですが、そのままにすれば流れてしまいきます。意識的にそれを拾うことを歴史学から学んだと思っています。誰でも自分が所属する組織が成長し、それが意味あると思えたらそれまで以上に組織への愛が深まるものです。この意味づけをするのが管理の役割であると捉え、二〇余年実践してきました。創設期からの活動を残されていた資料(史料)から辿って、意味を見出し自分たちもその都度の事には必死で取り組みながら、それが過去になる。また改めて見詰め直し、意味づけました。それを繰り返しながら、過去を現在に役立て、これからの道も見付けてきました。

歴史学との出会いがなかったら私はどんな管理をしていたのかと思うとぞっとするほどです。

その時々夢中になったことが

五〇代半ばを過ぎるとみな生きてくるものなのだなという思いを強めている今日この頃なのですが、これを統合というのかという感じ

です。

歴史研究は全く手がけていませんが、益々日常の中に歴史を意識して生きながら、「歴史に問うことは、やがて歴史に自らを賭けることである」(堀米庸三)という歴史観に共感できるまでになっているのですが、これが名のみの会員で居ることへの釈明になりますでしょうか。

それにしても、「戦後の看護改革」をお話頂いたお二人のお若いこと、そして昔からお強かったこと。歴史の真実の生き証人としてだけでなく、激動の時代を自らの安全も顧みず、看護職としての使命を全うされた人となりとその生きざまを、書き残さなければならぬと思いました。女性解放の歴史と切り離すことの出来ない看護の歴史ですから、新時代を切り開いた女性の個人史が一層重要ではないかと考えました。

また制度問題が表面化しはじめた中で、今はもう誰の所為にもできないのだという思いを噛みしめています。さて、職能の力は強くなったのでしょうか。

第九回大会報告

代表幹事 亀山美知子

八月五・六日の両日、京都市女性総合センター「ウイングス・京都」を会場に、第九回大会を開催しました。今年が戦後五〇年の年に当り、本会もまた「戦後五〇年看護改革の行方」をテーマに、当時GHQ(連合軍総司令部)に直接関った、金子光氏、大森文子氏、および地方改革に携った新井サダ氏(埼玉)、岡部登美子氏(京都)、高岡スミ子氏(福井)と、いづれも貴重な証言を得ることが出来ました。会場からも活発な発言があり、従来にも増して活況を呈しました。

会員による研究発表では、岸本多恵子氏「太平洋戦争時、陸軍病院に設置された看護婦生徒教育隊の実態をさぐる」他二題が発表され、特に岸本氏の報告ではこれまでの看護史上にも殆ど明らかにされていぬ貴重なものでした。分科会は会員・非会員の自由参加により実施され、相互に啓発を得られる機会となったと信じます。第九回大会は好評のうちに閉幕いたしました。参加者各位の御協

力に心より感謝いたします。

尚、今後もメインテーマにそった企画を展開したいと思いますが、それ以上に会員諸姉の研究者としての資質の向上に期待いたします。次に第九回総会では、前年度の方針であった学習会の開催は十分実施されぬままとなっており、今年度は各地で実施する予定です。また、第一〇回大会は本会の一つの分水嶺と考え、従来、開催地は大都市圏中心の傾向がありましたが、地方都市での開催を決定し、山形市での大会の実現をめざします。

尚、今年度は幹事の改選期に当りますので、別記の通り幹事選挙の公示を行ないます。幹事は一〇名で任期は三年です。新幹事は来年八月より任に就くこととなります。

最後に会費納入のお願いを重ねて申し上げます。五月二〇日付で三三名の五年以上の滞納者の方を名簿より削除いたしました。本会の運営は皆様方の会費収入によって成り立っておりますので、御理解、御協力を重ねてお願いいたします。

◆第一〇回大会予告

会期 一九九六年八月三日(金)  
二四日(土) 山形市内

日本看護歴史学会 1994年度会計報告

収入の部		(単位 円)	
項目	予算額	決算額	差し引き額
前年度繰越金	436,650	436,650	0
会費	600,000	794,940	194,940
		会員 172口 新入会員27口	
寄付金その他	30,000	162,684	132,684
		会誌等売上(67,470) 利息(5,214) 広告料(35,000) 寄付金(55,000)	
合計	1,066,650	1,394,274	327,624
支出の部		(単位 円)	
項目	予算額	決算額	差し引き額
事務経費	240,000	225,998	14,002
印刷費	(40,000)	(20,740)	
通信費	(150,000)	(123,303)	
文具、その他	(50,000)	(81,955)	
幹事会開催費	150,000	129,464	20,536
出版費	300,000	244,110	55,890
会報発行費	(100,000)	(84,460)	
		19号 41,200 20号 20,600 21号 22,660	
学会誌発行費	(200,000)	8号(159,650)	
会員名簿費	0	0	0
総会費	50,000	50,000	0
分科会費	20,000	7,020	12,980
予備費	306,650	0	306,650
合計	1,066,650	656,592	410,058

会計監査 大林 春子 ㊟ 徳川早智子 ㊟

日本看護歴史学会 1995年度予算案

収入の部		(単位 円)	
項目	予算額	摘要	前年度決算額
前年度繰越金	737,682		436,650
会費	600,000	150名×4,000	794,940
寄付金その他	50,000		162,684
合計	1,387,682		1,394,274
支出の部		(単位 円)	
項目	予算額	摘要	前年度決算額
事務経費	280,000		225,998
印刷費	(40,000)		(20,740)
通信費	(160,000)	会報 3回 学会誌 1回	(123,303)
文具、その他	(80,000)		(81,955)
幹事会開催費	150,000		129,464
出版費	300,000		244,110
会報発行費	(100,000)	年3回	(84,460)
学会誌発行費	(200,000)	年1回	(159,650)
会員名簿費	100,000	1回/3年	0
総会費	50,000		50,000
分科会費	20,000		7,020
予備費	487,682		
合計	1,387,682		656,592

※今年度会計監査 松田比佐子、高橋 典子

